

# 工 化 時 報

第27号



Since 1938

## 卒業研究発表会の様子

物質応用化学科では4年生全員がポスター形式で発表を行っています



**工化会会長あいさつ**

工化会会長 関口 優紀

(昭和48年工業化学科卒)



昨年私は中国に16回出張しました。行くたびに変化を感じ、高速道路、鉄道など社会資本の充実はまさに日進月歩の感があります。オリンピック、万博を実現し、功罪をもたらしながらも確実な経済成長を遂げています。それにともない就学率、高学歴化も進み09年には大学卒業数は約611万人でありましたが、10年はそれを上回る約630万人と予想されております。これに対して日本は64万人(内短大7万人)と中国の十分の1です。人口格差が大きいとは言え中国の就学率、高学歴化は急上昇しこの人材が中国を支えて行くのです。

翻って日本の今後は少子高齢化へ突入し、技術的分野の高度人材の不足は必至です。特に学生の理系離れは深刻で、工学部関連の志願者はここ5年で約4割も減少しました。「ゆとり教育による理科時間の減少」、「会社に入っても賃金は高くなく、地位も保証されない」などが理由としてあげられています。

私の20代を振り返ると、いわゆる団塊の世代ですから人数は多く、個々の競争は厳しいものがありました。とは言え、日本経済が拡大期にあり、期待を持って将来を見ることが出来ると共に、それぞれの段階において達成感、充実感をも味わえました。

好ましい外部環境の中で生きてきた我々の時代からすると今の若者に向かって「内向き」とか「安定志向」などと彼ら自身に責任があるかのような言い方は短絡的過ぎると思います。

若者が置かれている現状は極めて深刻で2009年に68%と低い大学生の就職率は、2010年には前年比よりさらに7ポイント減の61%となりました。その上、卒業者の12%、約7万人が就職も進学もしていないのです。

若者が働けない、働かないという問題は学科、学部のみならず、社会全体の問題でもありますが、工化会としても微力ながら支援体制をつくり、具体的には応化就職セミナーとし学生の就職に尽力しております。

慶応義塾大学前塾長の安西祐一郎氏は今年の成人の日「成人式を迎えた若者たちにとって一番大事なことは、その未知の時代を生き抜く力を身につけることだ。かれらを応援することは日本を逼塞状態にした責任を棚に上げ、莫大な社会保障費を若い世代に付回ししながら彼らを元気がないと叱咤するだけの大人世代が直ちに果たすべき責務である」(日本経済新聞1月10日19ページ)とわれわれ大人に痛烈な意見を述べておられます。

生き抜く力をつけてもらうにはどうしたら良いか、ここで将来社会に出て行く人に向けて感じていることを述べたいと思います。

高学歴化にともない、また近年の就職難も背景に大学院への進学者は増大しておりますが、彼らの多くは研究所、研究分野の業務を希望し、工場、製造現場での仕事を避ける傾向にあります。製造現場の情報が乏しく、どのような仕事内容なのかを把握できない中、工場はきつい、汚いというイメージを持つのでしょう。

しかしながら、仕事はどの分野においてもこれまでに獲得した知識、経験の上に新たな視点や、思考を加えて現状変革をなす、或いは新たな価値を作り出すことであって、企業が求める人材はそれを為しえる人です。研究開発であろうと或いは製造、営業など、どの分野であろうと変わりません。

また大学で身につけた化学的思考法を異分野に持ち込み、業務に取り組む方法も選択の一つです。大学で学ぶ専門とは職業選択分野を狭めることではなく、それぞれの学問分野の論理、思考を修得することであり、当然専門的知識は必要ですがそれは考え方を学ぶ手段であり、その考え方は自分の努力によりあらゆる分野に応用できます。自分の適職がどこかに存在するかのような思い込み、幻想は捨て去り、自分の価値を自分で築いて欲しいのです。工化会も2万名を超える各位の協力を得て、将来を担う貴君らを応援してゆきます。

静電容量型変位計・超音波リニアモータの輸入販売

*Progress & Creativity*

**ピー アンド シー株式会社**

〒150-0013 東京都渋谷区恵比須1丁目20番8号

(エビススバルビル5F)

電話 (03) 5793-1561 ファクシミリ (03) 5793-1562

昭和35年卒 代表取締役 **安達昭郎**

**「創設 90 周年記念ホームカミングデー」報告**

工化会副会長 深澤 豊史  
(昭和 52 年卒)

昨年 6 月、日本大学理工学部は創設 90 周年を迎え、その記念事業の一つとして、10 月 2 日に理工学部と理工学部校友会の共催による「創設 90 周年記念ホームカミングデー」が駿河台校舎で行われた。

当日は好天に恵まれ澄み切った秋空の下、1000 名を超える校友会会員が参加し、午後 1 時より 1 号館の CST ホールにて式典が開催された。参加者多数の為、一部が CST ホールに列席し、大多数は部会ごとに各教室に集いモニタースクリーンを見ながらの参加となった。初めに理工学部校友会会長の馬場邦明氏による挨拶、そして理工学部長滝戸俊夫教授より理工学部の現状と将来に関する話があり、その後記念講演として NHK アナウンサーの徳田章氏より NHK のど自慢に纏わる裏話やエピソードなど興味深い講演がなされ、2 時半に第一部が無事終了した。

第二部は 2 時 40 分より部会ごとに各教室でそれぞれの趣向により執り行われた。工化会は部会の中では最も多い 200 名を超える参加者が予定されていた為、特別に二部屋が用意され、それぞれの部屋で工化会の挨拶（会長と副会長が分担）、学科の現況報告（西宮教授と栃木教授が分担）、学科の就職状況（平野教授）、研究プロジェクトの紹介（大月教授）が行われ、3 時過ぎに無事終了した。

第三部の懇親会は、1 号館から場所を移し、9 号館前の広場をメイン野外会場とし、隣接道路を封鎖して行われた。多数の参加者ではあったが 1 号館からの移動は特に混乱もなく速やであった。軽食や飲み物は 7 号館の各教室にも用意され、参加者は野外会場と 7 号館の各教室（2 つの部会で一室）に分散し、懇親会は盛大に催された。工化会会員の集う 752 教室は航空宇宙部会と同室であったが、圧倒的に人数の多い工化会の主導で行われた。メイン野外会場では参加者中最年長で居られた天野章氏（昭和 16 年卒 工化卒）による乾杯発声、752 教室では高田助教の司会の下、栃木教授の乾杯発声により行われた。メイン野外会場では鏡割りなどの余興も披露され、7 号館で歓談中の参加者は窓越しに見て楽しむことが出来、同期生、同じ研究室の出身者どうしでの歓談の輪が

いくつも出来上っていた。こうした和やかな雰囲気の間、752 教室では、関口工化会会長はじめ数人の参加者よりお祝いのスピーチ、また途中教室に立ち寄られた滝戸理工学部長からも一言頂き、会は徐々に盛り上がり行った。まだまだ続けたい気持ちを残しながら、理工学部次長山本寛教授の中締め挨拶があり、第三部懇親会は5時に無事お開きとなり、9号館前では記念品引渡しカウンターが用意され、参加者全員に記念品(冊子写真集「新・旧1号館の建築」2巻セット、「日本大学理工学部90周年史」CD、など)が配られた。

終わってみると、物質応用化学科と工化会の活躍が印象的であった。滝戸理工学部長が当学科の教授であること、乾杯発生の最年長の天野章氏が工化会会員であったこともあるが、何といても14部会の中では最多の参加者(全体の約2割)を招集したことが印象付ける要因であったと思う。これだけの大人数を招集できたことは現役の先生方のご尽力によることは言うまでもない。予想以上の予定出席者数のため二部屋への二分を余儀なくされたハプニングにも拘らず、短期間で綿密な計画を立て、前日までメールのやり取りを行いながら、工化会会員向けに独自にレジュメや記念品の配布、高齢の会員への配慮、迅速なる当日の設営など、チームワークは見事であった。庶務委員の先生方を始め実務に携わられた先生方、ご協力いただいた先生方に改めて感謝の意を表したい。工化会会員参加者では、最年長の天野章様はじめスピーチを賜った昭和21年卒の馬場和朗様など大先輩諸氏の参加が印象的であった一方、このたびは若い年齢層会員への広がりも見られた。この様な良好な兆しが見られてきた事はこれからの工化会独自で実施していくホームカミングデーや物質応用化学科創設80周年記念行事を見据え、大変嬉しい事である。明るい期待を抱いて、以上報告とさせていただきます。

(※理工学部校友会ホームページにスナップ写真掲載)

→ <http://www.koyukai-cst-nu.jp/>

産業廃棄物の収集・運搬、中間処理及びリサイクル



〒341-0044 埼玉県三郷市戸ヶ崎 3-347

60年卒 鈴木 義 弘

TEL 048-955-1632 E-mail : [sanei-k@misato-net.com](mailto:sanei-k@misato-net.com)

ホームページ : <http://www.misato-net.com/3ak/>

## 工化会賞受賞者の声

### 平成21年度 70周年記念賞若手研究者支援受賞者



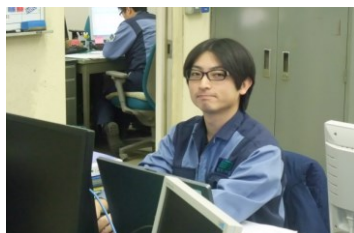
赤澤 寛行  
(2010年博士後期修了)  
生物資源化学研究室卒

現在、タイのチェンマイ大学の Natural Product Research and Development Center で博士研究員（ポスドク）として研究しています。タイと聞くと、独特な風味の料理やムエタイなどの格闘技などがイメージとして挙げられますが、タイは薬用植物の宝庫でもあります。伝統的に使われている薬用植物は、様々な病気に対して単独で用いられるだけではなく、それら植物を混合して現在でも使われています。本研究所では、それら植物の現代的な応用と更なる発展を目的として研究を行っており、私の場合は特にがん治療の観点から、腫瘍細胞に対する植物抽出液の活性を評価しています。

私は今まで、外国にもあまり行ったことは無く、一人暮らしなども初めての経験で、普段の研究などのコミュニケーションは英語で行っていますが、生活するという点においてはタイ語も必要です。当初は、若干心配でしたが、なんとか必要最低限のタイ語は喋れるようになり、自分は結構順応性があるのだと、自分自身で驚いています。また、大学在籍中の時と比較して、短い期間で結果を求められるなど、さらなる責任とやりがいがあり、充実した生活を送っています。

現在は、世界的な不況などで、将来の見通しもなかなか立たないと思われませんが、そういう時にこそ、自分のやりたいことなどをしっかりと見据えて、何事も経験ですので、自分の限界を狭めずにチャレンジしていく事が大事であると思います。

今後は、もし機会があるならば、他の国も視野に入れて、更に見分を広めていきたいと思っています。



諏訪 和也  
(2010年博士後期修了)  
有機合成化学研究室卒

私は2004年4月に有機合成化学研究室に入り、大月穰教授のご指導を受け、学士、修士を経て2010年3月に博士号を取得致しました。4月からは社会人として、チッソ株式会社（2011年1月現在）に勤務してお

ります。弊社では、多くの人が持っている携帯電話やパソコン、テレビに使用されている液晶材料を製造しており、世界の約50%のシェアを持っております。弊社の液晶材料は、合成過程で2010年ノーベル化学賞の鈴木カップリングや根岸カップリングの技術を用いており、大変話題になりました。その他、近年ディスプレイに使用されている有機EL材料、自動車や食品包装、家庭用雑貨、医療器具に使用されているポリプロピレン、おむつやマスクに使用されている不織布、化粧品に配合されているヒアルロン酸等、生活に密着した製品を製造しております。弊社では、技術系は1年間プラントで研修として、3交替実習(6か月間)と現場改善検討(5か月間)を行います。私は、ポリプロピレンの製造現場で研修を行っております。3交替実習はすでに終了しましたが、夜勤でも日勤と同じパフォーマンスで業務をこなさなければならず、体調維持・管理が非常に大変でした。しかし、ラボとは異なった現場での業務やそこで感じられた雰囲気は、経験しなければ理解できないし、今後仕事をする上での貴重な体験であったと思います。現在は、現場改善検討で現場での運転上の問題やコストなどの改善すべき事項において、データを収集したり、現場で試験したりして、改善策を提案する研修を行っているところです。今後は、自身が開発した製品を世界中の人達に使って頂くことが目標です。

### 平成21年度 70周年記念賞奨学生支援受賞者

高分子合成研究室所属 中野 春奈  
(平成22年 物質応用化学科卒)

現在、私はナタデココとして知られているバクテリアセルロースの成形加工方法の改良を研究課題に日々実験を行っています。また積極的に講義を受け、勉学に励み、より一層知識を身につけることができていると思います。このように充実した学生生活を送ることができるのも、工化会の皆様の御支援があったためです。本当にありがとうございます。今後も勉学に励み、様々なことにチャレンジしたいと思います。

化学工学研究室所属 仲村 良信  
(平成22年 物質応用化学科卒)

私は現在、超臨界二酸化炭素と有機溶剤を作業流体とした環境調和型ヒートポンプの開発を進めております。このように研究に打ち込めるのも、ひとえに工化会の皆様の御支援の賜物であると心より感謝しております。また、この受賞を励みにこれからも研究に邁進していきたいと考えております。これから大学院を志望する後輩たちのためにも、このような素晴らしい支援を今後も続けて下さることを願っております。

## 平成22年度就職状況



応化就職指導委員会  
委員長 平野 勝巳

### ○進路指導委員会報告

『厚労省と文科省が全国の大学，短大，高専，専修学校を対象に本年度の内定率を調査した結果，10月1日現在で62.5%と前年度の69.9%から急落したことが判明した（下落率は1996年の調査開始以来最大）。当学科においても10月時点の内定率は学部生が53%，大学院生が77%であり，「就職決定率は希望者のほぼ100%に達している」との定型句が書けない未曾有の事態に陥った。』……実は，これは昨年度発行された工化時報第26号の同ページ原稿である。

ところが，平成23年1月18日に厚労省と文科省から発表された資料（下図参照）には，「大学（平成23年3月大学等卒業予定者の平成22年12月1日現在）の就職内定率は68.8%で前年同期を4.3ポイント下回りました（就職内定率は平成8年度の調査開始以来過去最低の水準）。ただし，前回よりも前年同期との差は縮小（平成22年10月1日現在は57.6%で前年同期を4.9ポイント下回る）しています。また男女別にみると，男子は70.1%（前年同期を2.9ポイント下回る），女子は67.4%（前年同期を5.8ポイント下回る）となっています。」と記載されており，昨年度の「未曾有の事態」を上回る状況が生じていることがわかる。さらに，「しかもこのデータは以前報じたように，水増しの疑惑があるのだ。文科省の調査は内定者÷就職希望者数で内定率を弾き出しますが，そのサンプルになった大学は全国約800校中わずか62校。しかも，その顔ぶれは東大，一橋，早慶，上智など有名校が中心。調査の母数がもともと小さいうえに，抽出サンプルは就職に強い大学ばかりで……。『これじゃ，公表データはあてにならない』と，当の文科省幹部がボヤいていたほどです」などの報道もあり，本年度の就職戦線はまさに泥沼化している。

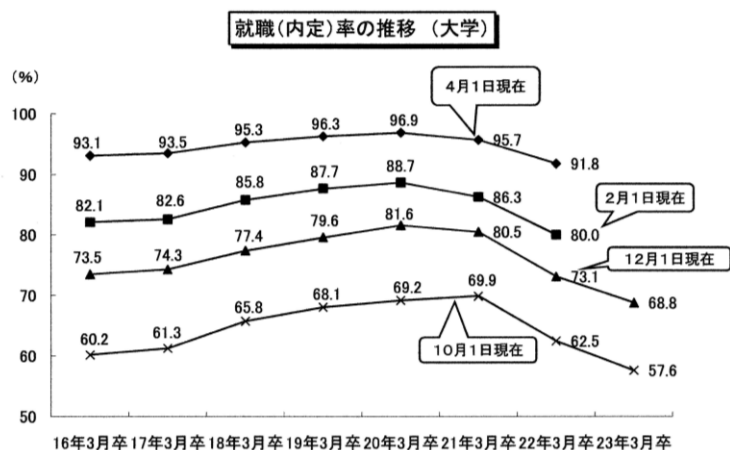
このような状況の中で当学科学部生（平成23年3月卒業予定者）は，平成22年12月末日現在の就職・進学内定率が78%と大健闘している。ただしこれにも紆余曲折があり，い



いわゆる「春採用」後の内定率が約20%と当学科の歴史上類を見ない低さとなった6月以降、進路指導委員会は内定未取得者全員に聞き取り面接すると共に当学科卒業生の採用実績がある企業と連絡を取って、彼等を「売り込んだ」結果である。一方、当専攻大学院生（平成23年3月修了予定者）の平成22年12月末日現在の就職・進学内定率は上記の「売り込み」を行っても58%で、厚労省・文科省の12月1日現在データ（大学等は68.8%）より低い。

これらから本年度の当学科・専攻学生の就職活動を振り返ると、①受験準備（SPI対策等）が遅い上に、②受験企業の規模（難易度）、業種（専門分野）、職種（専門技術）などの目標設定が甘いため、最大規模で行われる「春採用」に勝ち残れなかったと考えられる。さらに、学部生はその後目標を変更して（下げて）「夏採用」や「秋採用」に臨んだため内定を取得できたが、より専門性の高い大学院生は目標を変更しにくい変更しても専門性の異なる大学院生を企業側が敬遠したため、なかなか内定に結びつかなかった可能性がある。

すでに次年度の戦闘は始まっているが、以上を踏まえて進路指導委員会では次年度卒業・修了予定者に①早めの受験準備と、②自己分析から適正な目標設定を指導していく所存である。また、昨年度発行された工化時報第26号の同ページ原稿を繰り返すが、「今こそOB、OGの方々の積極的かつ具体的な支援をお願いしたい。」



以上

## 退職にあたって



栃木 勝己  
(昭和44年修士課程修了)

2011年3月末をもって日本大学理工学部を退職します。1969年(昭和44年)6月に理工学部助手として奉職以来、41年間勤務したことになります。

助手から専任講師に昇格するまでの16年間は恩師小島和夫先生と絶えず一緒に過ごし、様々な薫陶を受けました。短期大学部時代の9年間は主に企画調整委員会の仕事を通して多くの教員、事務局の方々と親しくさせて頂き、私の財産の一つになりました。また、磯崎昭徳先生の後任で応用化学科学科長も経験させて頂きました。理工学部に戻ってからは、応化就職セミナーの立ち上げ、ミネソタ大学との国際交流や教科書「物質応用化学科インセンティブ」の編集の手助けをさせて頂きました。

教育と研究はそれなりにやってきたと思っております。卒業研究時から続いているエブリオメータを用いた実験的研究、学位論文「グループ溶液モデルによる気液平衡の推算」を発展させたASOGグループ寄与法の進歩、化学工学物性定数編集プログラム開発から始まった各種データベースの構築が私の研究テーマの3本柱になっております。特に、「グループ寄与法に基づく化工物性の推算」に対しては、インド化学工学会からケムコン優秀講演賞を受賞しました。これも、化学工学研究室卒業生のお陰と感謝申し上げます。

学会活動としては、化学工学会では30年以上務めた物性定数調査委員を中心に、超臨界流体部会・部会長、国際交流委員会AICHE担当、関東支部企画委員長を、また分離技術会では現在企画委員長を務めております。NEDO技術委員も2年間務めました。

以上、小島先生から、「手仕事の重要性」を学び、「東大から招かれるような研究者になりなさい」と激励され、また「頼まれたら前向きに」をモットウに歩んでまいりました。今後、非常勤講師として大学にお世話になります。また、趣味のテニス、クラシックギターに生きるだけでなく、学会活動もいくつか依頼されており、健康に留意しながら生活していく所存です。40年間、越智先生をはじめ栗原先生、松田先生及び皆様からのご支援、ご尽力、誠に有難うございました。

## 退職します



長田 洋子

物質応用化学科（環境微生物研究室）山中健生先生の後任教授として姫路工業大学（現兵庫県立大）から赴任して以来、早いもので10年が過ぎようとしています。それまで、私立の大学と縁の無かった私の私大に対する一般的なイメージは、多い講義時間・マスプロ教育・少額研究費などでした。ところがこちらに来ましたら、研究費は前任大学よりずっと潤沢であり、講義時間数は以前と同程度だったので喜びました。ただ、研究室に所属する卒業生の数がやたら多いのに驚きましたが、そのうちに慣れました。生命科学系の授業を担当してきましたが、学生の多くはまじめで礼儀をわきまえているのは日大の伝統かもしれないと思っております。

1日も病気で欠勤することなく、かなり快適にこの10年間で過ごすことができたのは、両親から受け継いだ体質もありますが、職場における周囲の方々のご協力のお陰であると感謝しています。研究面では、アミノ酸のD型光学異性体の生体内での働きの解明に力を注いできました。研究材料は熱湯中で培養する微生物やカイコなどです。以前はアイデアが湧いても人手が少なく、また、研究費の面で問題があり着手できなかったような研究プロジェクトを、こちらでいくつか推進することができました。まだ進行中のものもありますが、それらの成果をcorresponding authorとしていくつかの国際的な学術専門誌に発表しました。

あとしばらく、非常勤講師として授業を担当しながら、継続中の研究を完成させることを望んでいます。そして、東京見物です。この10年間、連休の時は大阪で過ごしてきたのであまり東京を知らないのです。多くの大阪生まれ・大阪育ちの人間は、“東京”に対して、「反発とあこがれ」という少し複雑な気持ちを抱いているものです。しかし、生粋の“東京人”などごく少数派で他県出身者が大多数であること（この状況は大阪でも同じです）は学生の出身高校からもわかってきました。また、東京は物価が高い、冬は大阪より寒い、などと聞いていましたがそのようなことはなく、電車の乗り降り、順番待ちの行列、通行する時の道の譲り合いなどでのマナーの良さに、暮らしやすさを実感しています。“東京”に近づけた10年間でもありました。

## 新任紹介

物質生命化学研究室  
教授 櫛 泰典



平成22年4月より物質応用化学科に着任しました櫛と申します。私は昨年まで帯広畜産大学で教鞭をとり、主に生化学、分子生物学を基礎とした教育・研究を進めておりましたが、本学では生命科学系の新しい研究室(物質生命化学研究室)を立ち上げております。生命科学の進歩は非常に早く、そのスピードはますます加速される勢いです。しかしながら生命科学の本質は基本となる生命を構成する化学構造の理解とその性質を十分に把握することであり、今後のこの学科の新しい教育体系の中でより重要な役割を担っています。

この度、本学科の一員として加えて頂いたことは光栄であり、身の引き締まる思いです。本学科の歴史と伝統に恥じない教育・研究を目指し、この学科の更なる発展の為に残された時間を粉骨砕身励む所存でおります。また23年度から新任の助教を迎え、一日でも早くより充実した教育・研究体制を築きたいと考えています。何卒ご指導とご鞭撻の程宜しくお願いいたします。

## 新任紹介

触媒化学  
助教 梅垣 哲士



平成22年度4月より物質応用化学科助教として奉職することになりました梅垣哲士と申します。平成16年度に東北大学大学院工学研究科応用化学専攻を修了後、産業技術総合研究所での5年間の在籍を経て、本年度より当学科でお世話になることになりました。大学院、研究所時代を通じ、コンビナトリアルケミストリーやナノ構造制御などをキーワードに金属や金属酸化物触媒の研究に従事してきました。これらの研究を通じて、主にアルコールや水素といったエネルギー媒体を効率的に製造する技術やこれらの媒体を精製する技術の開発を目指してきました。研究者としてもまだまだ修行の身ですが、教員経験は全くなく、スタートを切ったばかりです。至らない点多々あるかと存じますが、研究者としても教員としても尽力して参りたいと存じておりますので、よろしくお願い致します。

## 新任紹介

電気化学  
助手 須川 晃資



平成22年4月から物質応用化学科に助手として奉職することになりました須川と申します。私は、上智大学大学院修士課程を修了後、企業研究所にて2年間勤務しました。退社後、九州大学大学院博士課程に入学し、学位を取得後、1年間の企業研究所勤務を経て、現職に着任致しました。電気化学を専門とし、ナノサイズの物質がもたらす新規な物理化学特性を開拓することで、学术界、ひいては環境・産業社会にも貢献豊かな研究成果を目指しております。最近では、例えば有機太陽電池に資する光電変換システム、ナノサイズの微細なスイッチング素子の開発等に注力しております。「成功した人間になろうと思うな。むしろ価値のある人間になろうとせよ」というアインシュタインの名言にもあるように、研究・教育を通して、価値のある、人に必要とされる学生の育成を心がけると共に、一流の教育・研究者への自己成長を促したいと考えております。よろしくお願い致します。

## クラス会・同窓会の報告

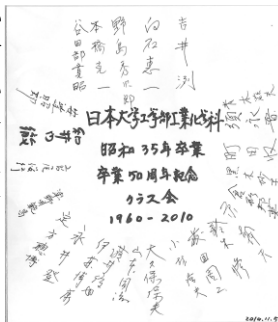
### 工化35卒50周年記念クラス会たより

2年毎に集うクラス会が11月5日市ヶ谷私学会館に於いて総勢24名の参加で開かれた。今年が卒業後50周年となる記念会になり大いに盛上った。開会の挨拶並びに仲間の近況・消息紹介に続き新制1期卒の先輩 和井内先生から祝いの挨拶と読書の奨めのお話を頂戴した。数十年ぶりの参加者もあって、先ず仙台から駆けつけた須藤 晋君による乾杯の音頭で杯を上げ、いよいよ歓談に入る。用意の料理に手を出す時も惜しみ、あちこちで歓談の輪が咲き華やいだ光景となってきた。恒例の1分間スピーチは今回に限り持ち時間を増やして一人ずつ50年を振り返って懐かしを語り、さらに今年のノーベル賞化学賞の鈴木・根岸両博士によるクロスカップリング反応に関しても話題がおよび、日本の化学の活躍ぶりを慶ぶなど、併せて日大化学科の益々の躍進を祈念した。記念の会と思って色々企画してみたが、当日は殆ど仲間同士間の会話に終始して何よりのイベントになったと思う。会場の片付けが始まっても輪は解けず盛り上がり続け、ついに記念写真の撮影も忘れてしまった。写真の代わりに参加者全員にから色紙へのサインを貰ったのでここに披露す

る。顔写真より名前のほうが分かりやすいと思うが。段々とメンバーには病に罹っているのが散見され、仲間に是非会いたいと悲壮な声も聞こえるし、遠くて参加できないのが残念とそれぞれに懐かしさがこみ上げてくる便りが多くあった。我らもそれなりの年齢になってきたのだろう。

では皆さん元気で過ごされますように、また2年後の集いに！

追伸 仲間の最新の近況メモ付名簿を希望する方は幹事まで連絡下さい。(2010.12.2) (安達記)



## 荒井康夫先生叙勲祝賀会報告

春の叙勲で瑞宝中綬章を受章された、本学名誉教授荒井康夫先生の叙勲祝賀会が、平成22年10月9日に本学1号館にて、100名を超える方々の出席を得て、盛会裏に執り行われました。祝賀式典は121号室で開催、主催者を代表して無機材料化学研究室の西宮先生の挨拶に始まり、60年来の親交がある東京都立大学名誉教授の金澤先生、続いて理工学部長の滝戸先生、東京大学名誉教授の妹尾先生から祝辞を頂きました。その後、荒井先生の記念講演にうつり、記念誌『人生の一里塚』をもとに、無機工業化学研究室内の創成期について、予定時間を大幅に超えて熱く語られました。祝宴は、121号室の隣のカフェテリアで、法政大学客員教授守吉先生の挨拶と乾杯の発声で始まり、荒井先生ご夫妻も会場をまわられ、随所で歓談の和が広がるなか、無機会会長石井様の挨拶でお開きとなりました。(S49年卒 元木)



## 有機合成化学研究室同窓会「PS会」 第21回通常総会

PS会は日本大学理工学部物質応用化学科(旧工業化学科)有機合成化学研究室内の昭和46年3月卒業生を第1期としていて、同研究室で卒業研究を行った学生で構成しています。卒業研究や修士・博士論文をご指導いただいた先生方を特別会員としている点に特徴があり、特に会則がない点もまた特徴です。各卒業年ごとの幹事と幹事の互選による役員が中心になって活動しています。PS会と言う名前は第1回総会(昭和55年)の開催



に当たり、幹事代表・特別会員の滝戸俊夫先生(現理工学部長)をはじめ、幹事有志で相談した結果、研究室で取り扱っていた化合物がイオウ「S」とリン「P」だったので、それらの元素記号に由来して名付けています。PS会は慣例により、隔年での総会開催を原則としていますが、研究室や特別会員の先生方の吉事に合わせた総会も開催しています。平成22年度は通常総会開催年に当たり、去る12月11日(土)に東京お茶の水ホテル聚楽(千代田区神田淡路町)にて第21回総会を開催しました。今回は特別会員の大月穰先生の理工学部教授昇格、特別会員の妹尾学先生の「傘寿」、特別会員の中沢利勝先生の「喜寿」と言う3つの吉事を機にお集まりいただき、大月先生には特別講演をして頂き、講演後に懇親会を開催して、旧知を温めることができました。更に今回もPS会には先達の同窓会に当たる「有機同窓会」の会長の炭田幸宏様、ならびに役員の団野正博様にもご参加いただいています、世代を超えた集まりとなっています。

## 平成23年度高分子合成同友会開催のお知らせ

高分子合成研究室は1972年に設立されてから2010年3月までに約950名の卒業生を輩出しており、本年41期目の卒業研究生を迎えた。第9回目の総会は2010年11月13日(土)駿河台校舎1号館にて昭和49年卒業の高山正夫様からの講演もあり、約100名の参加により大盛況であった。懇親会の席上で大学院生の研究ポスター発表会を行い、優秀賞を3グループに授与した。さらに、参加者の交流を促すイベントも好評であった。次回開催日は2011年11月12日(土)を予定している。本会は、豊富な人材ネットワークを気軽に活用できるサロン風産学連携拠点として研究室の枠を超えたネットワークへの発展を強く願っている。興味ある方は研究室(澤口 sawaguti:03-3259-0819; 萩原 hagiwara: -0433; 星 hoshi: -0825; \*\*\*\* @ chem.cst.nihon-u.ac.jp)にご一報を!



**叙勲のお祝い**

日本大学名誉教授  
荒井 康夫 先生



1999年まで工業化学科無機工業化学研究室を主宰され、現在日本大学名誉教授の荒井康夫先生が、22年の春の叙勲において瑞宝中受章を受けられました。これは無機工業化学における先生の多年の研究と教育のご業績が高く評価されたものです。先生のご研究は、縮合リン酸塩の合成、Ca-Mg系過リン酸カルシウム、CaO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物の合成と溶解、CaO-SO<sub>3</sub>系化合物の構造と性質、セメント硬化体中の水和物の特性、CaO-SiO<sub>2</sub>系化合物の非晶質化、粉体のメカノケミカル現象など、肥料、セメント、セッコウ、石灰の全般にわたっております。これらの成果は多数の論文にまとめられています。また、学会活動として日本セラミックス協会の評議員、無機マテリアル学会の会長などを務められました。学生教育にも力を注がれ「セラミックスの材料化学」をはじめとする教科書となる本も数多く出版されました。今後ますますのご健勝をお祈り申し上げます。(小嶋)



日本大学客員教授  
岩村 秀 先生



平成17年より本学大学院総合科学研究科教授、22年より本学部客員教授の岩村 秀先生が、22年春の叙勲において瑞宝中受章を受けられました。これは、先生の東京大学に始まり日本大学まで約50年に亘って続いている教育と研究の功労とその顕著な業績が高く評価されたものです。先生のご研究は、新しい $\pi$ 電子系有機化合物の設計と合成、及び物性の開発の研究に関するものであり、特に「フリーラジカルの電子スピンの集積と整列による分子性磁性体の構築」の研究は極めて独創的なものであり、国内外で高く評価されています。このように多年優れた業績を挙げ学術の進歩に寄与したことが認められ、平成4年には日本化学会賞、8年には紫綬褒章、10年に藤原賞、更に15年日本学士院賞が授与されました。また、日本学術会議会員、日本化学会会長、日本化学連合初代会長などを歴任され、科学者を代表して積極的に我が国の科学技術及び科学技術政策のあり方について発言してこられました。今後ますますのご健勝をお祈り申し上げます。(澤口)



## 平成22年度工化会事業報告

平成22年度工化会通常総会は、駿河台校舎1号館2階カフェテリアにて平成22年5月29日(土)午後2時より役員・会員84名(委任状507名)の出席を得て開催されました。総会では、庶務、会計、会員、会報の各委員会の平成21年度事業報告および会計報告、ならびに平成22年度事業計画および会計予算案、役員の変更案、校友会の個人表彰の推薦者案、理工学部創設90周年事業案等の審議を行い、これらを承認しました。通常総会終了後、同会場で懇親会を催しました。本年度の懇親会には還暦を迎えられる卒業生の皆様をご招待し、盛会の内にお開きとなりました。

事業計画としては役員会、通常総会の開催、駿河台入試フォーラム2010・第11回日本大学理工学部一日体験化学教室・CSTオープンキャンパス2010・第7回産学連携交流会・第5回物質応用化学科就職セミナー並びに第3回短大ものづくり&サイエンススクールの後援、工化会独自の講演会の開催、理工学部創設90周年事業としてホームカミングデーの実施、工化会賞の授与が決まりました。この中で工化会独自の講演会は、平成22年5月7日(金)・8日(土)に行われた物質応用化学科新入生オリエンテーション(於日本大学軽井沢研修所)の際に第1回目を、会員の山浦信介氏(昭和57年卒、京葉ガス株式会社)に講師をお願いし、新入生に「キャリア教育」についてお話していただきました。第2回は理工学部創設90周年事業の一環の記念シンポジウムとして10月1日(金)に行われ、大橋隆氏(昭和38年卒、ブリジストン)と工化会前会長の藤池誠治氏(昭和41年卒、株式会社デサン)をお招きしました。本シンポジウムは卒業生から在學生にエールを送るという主旨で企画されたものであり、お二人には、「実りある学生生活を送るには」(大橋氏)、「会社はどういう人材を求めているのか ー トップになるためにはー」(藤池氏)と題して、本学科の学部生・大学院生に、その熱い気持ちを伝えていただきました(理工学部創設90周年事業のもう一つの目玉企画であるホームカミングについては、深澤副会長の90周年記念式典報告をお読み下さい)。

また昨年度から工化会として卒業時に、在学時の学術・文化・スポーツ等において顕著な結果を残し、工化会の名誉を高めるに貢献した学生に工化会賞を授与することに致しました。本年度も厳正な審査の結果、大学院生4名、学部生2名、短大生1名を表彰者として、3月25日(金)の学部・大学院・短大の学位記伝達式の際に、賞状と記念品を贈り、その栄誉を讃えました。なお本学科の創設70記念事業として制定された若手研究者支援(大学院博士後期課程在学者が対象)、奨学生支援(学部の成績優秀者で特待生を除く)、奨励賞(大学院・学部・短大の修了・卒業予定者で高難易度の資格免状等を取得、または好成績を収めた学生が対象)については、それぞれ、2名、2名、20名に対して支援・授与が行われました。

平成 22 年度の工化会予算については、予算を経常会計予算と特別会計予算の 2 種類作成しており（特別会計とは準会員（学生会員）還付金を管理するための会計です）、平成 22 年度経常会計予算は総額 431.0 万円で、学生支援事業（88.2 万円）各種講演会・行事補助費（71.0 万円）、卒業生支援事業（193.9 万円）、その他（1.0 万円）、次年度繰越金（76.9 万円）であり、特別会計予算は総額 1088.6 万円で、卒業生支援事業（20.0 万円）、会費・寄付金郵便振替対応業務（3.7 万円）、次年度繰越金（1064.9 万円）を計上しております。なお、平成 22 年度の会員諸氏による会費の納入状況（平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 1 月 31 日）は、納入者数 385 名、納入金額は約 85 万円となっています。納入者の中には複数年度分の会費を納入された方や、寄付をお寄せいただいた方も多数おられますが、本号の会費納入者氏名一覧の掲載を持ってこれらの方々への御礼に換えさせていただきます。

さて、本年度は理工学部校友会の個人表彰者として工化会から、工化会元会長の安達昭郎氏（昭和 33 年卒）を推薦致しました。

最後に平成 22 年度の工化会主催行事ならびに後援行事の概要を記載します。

- ① 4 月 17 日(土) 15:00～18:10 役員会 役員 35 名出席(委任状 28 名)
- ② 5 月 29 日(土) 14:00～15:00 通常総会
- ③ 7 月 18 日(日) 駿河台入試フォーラム 2010 高校生 241 名が参加
- ④ 7 月 24 日(土) 第 11 回日本大学理工学部一日体験化学教室 高校生 58 名が参加
- ⑤ 7 月 31 日(土) CST オープンキャンパス 2010 高校生～8 月 1 日(日) 690 名が参加
- ⑥ 10 月 1 日(金) 理工学部創設 90 周年記念シンポジウム
- ⑦ 10 月 2 日(土) 理工学部創設 90 周年記念ホームカミングデー
- ⑧ 10 月 31 日(土) 第 3 回短大ものづくり&サイエンススクール 地域の方 305 名が参加
- ⑨ 2 月 25 日(金) 第 7 回産学連携交流会
- ⑩ 2 月 25 日(金) 第 5 回物質応用化学科就職セミナー

以上 庶務委員会

PVC・他合成樹脂 コンパウンドメーカー

## 昭和化成工業株式会社

本社・工場 〒348-8585  
埼玉県羽生市小松台1-603-29

総務・経理  
TEL 048-561-5221 FAX 048-561-5229

生産管理・購買  
TEL 048-561-5222 FAX 048-561-5229

技術開発  
TEL 048-561-5225 FAX 048-561-5228

品質管理  
TEL 048-561-5226 FAX 048-561-5496

東日本支店 〒113-0033

東京都文京区本郷3-6-9 エルデ本郷館4F  
TEL 03-5840-5531 FAX 03-5840-5541

西日本支店 〒632-0011

大阪府大阪市淀川区西中島4-3-8 新大阪阪神ビル10F  
TEL 06-6307-2727 FAX 06-6307-2748

北陸支店 (2007年3月開設予定)

福井県福井市日之出1-29-1

VINA Showa co.,Ltd.

ベトナム/ホーチミン市

昭和53年卒業 代表取締役社長 池本 俊一

# 会費納入者名簿 (平成23年2月1日現在)

網掛けは会費十寄付の方です  
計617名

昭和16年卒 安沢 俊二 和田守 晋治 天野 幸 櫻村 正久 津崎 統一 源部 剛 小川 守三 稲垣 達雄 笹岡 義人 浅谷 公洋 金井 昇介 小川 和夫 吉永 利男	昭和20年卒 石垣 恭弘 田村 碩基 三田 郁夫 宮尾 利政 岩崎 晃 栗田 吉男 佐藤 正巳 板井 裕 徳永 静 福島 敏郎 堀 武 山口 猛 源達 靖	才木 義夫 藤藤 二郎 高木 三郎 玉井 滋夫 中島 興喜雄 西野 武 藤田 亘弘 森浦 滋 宮森 隆志 守屋 伊佐雄 吉田 靖 広瀬 俊雄 青木 弘 原 幹夫	昭和34年卒 池田 実 岩瀬 方夫 牛久保 勝弘 児玉 五男 坂井 延二 曹井 博蔵 菅 道夫 横倉 隆康 栗原 孝夫 宇賀治 正名 渡辺 真郎	昭和35年卒 安達 昭郎 青木 隆志 石川 裕隆 植堂 一 笠井 啓也 榎原 康敬 門倉 利夫 成光 隆夫 河合 哲次 塩澤 道 高尾 俊行 瀬澤 文男 西崎 泰世 町田 収 南 一郎 谷田部 寛昭 米澤 修一 渡邊 高章 尾崎 武二 倉形 邦英 佐久間 恒和 赤池 昭彦 石井 昭昭 須藤 隆司 山口 勝 高橋 健一 宮本 實 村川 信子 成也	昭和36年卒 村上 靖雄 石井 昭明 石川 隆夫 宇賀治 正名 漆原 孝太郎 越智 健二 越戸 焄 河内 宗弘 北林 伸一 栗村 規雄 齋藤 進 坂本 昌伍 鈴木 善治郎 崎下 昌道 高柳 裕臣 和田 光司 古澤 裕 武本 規雄 望月 信彰 横山 樹静 橋本 昌弘 佐藤 貞男 砂川 密二 野村 友次 中村 紀史	小島 昭宗 昭和37年卒 伊藤 成利 井上 靖治 奥山 正之 根山 秀矩 若澤 守雄 小川 昭朗 駒井 俊雄 清水 大三 庄司 翠 杉崎 秀夫 丹野 彰 津崎 信隆 塚田 政弘 長谷川 修一 本田 睦治 森 隆郎 古田 龍右 徳嶋 昭徳 守一 長友 良久 青木 匡 植木 庄左衛門 児玉 義宏 吉井 彰子 佐野 直道 生駒 二郎 岩本 恒夫 大村 次雄 小松 允公 栗田 公夫 一 清井 誠一 白鳥 照道 竹内 栄多 塚田 豊 内藤 清剛 中澤 隆夫 原 正樹 山口 重周 長松 渡谷 裕松 小嶋 洋 長嶋 浩 白石 益郎 杉田 松生 藤野 裕 昭39年卒 赤池 昭彦 石井 昭昭 佐藤 隆司 山口 勝 片岡 康浩 金田 敏一 神谷 中 亀村 轟 渡辺 久和 児玉 義宏 佐藤 栄一 齋藤 伸之 齋藤 守園 海山 幸三 瀬井 宏 竹石 肇 武田 幸久 中田 博 仲野 一次郎 野口 文雄 野尻 義雄 原 義輔 平井 勲 堀 是治 田嶋 安郎 矢野 彰一郎 山崎 彰 横田 力男 和田 高伸 清水 重光 橋崎 重光 香山 武夫 北村 隆 小原 英雄 小尾 直朝 瀬尾 誠悦 田原 恭一 高松 武生	寺山 洋子 工藤 智教 小笠原 一恵 小笠原 守人 金子 繁司 森岡 宣彦 森 弘通 木曾 義和 木村 文紀 熊谷 一弘 大沼 明 佐藤 慎一 末澤 二郎 伊藤 和宏 原 清文 渡水 浩夫 大坪 利彰 鏡吉寺 繁 高田 繁 石見 勝洋 鈴木 義弘 小谷 将彦 片桐 正志 加藤 慎次郎 幾留 孝司 石井 睦子 中道 幹芳 三井 宏 磯岡 誠也 岡田 美和子 西野 元行 高田 昌子 宮崎 裕子 藤池 一誠 堀江 里衣 米田 哲也 清水 幸 佐藤 順一 岡田 賢蔵 谷合 善行 吉川 善平 浮谷 基彦 林 秀憲 伊掛 浩輝 浮谷 彰 松田 弘幸 小野 博之 平成13年卒 橋内 誠 小島 正浩 藤田 尚之 角田 雄亮 吉川 賢治 瀧澤 隆子 平成15年卒 山根 麻衣子 平成16年卒 田代 哲也 最上 尚行 瀧澤 隆子 薄 舞子 栗村 嘉明 萩原 謙二 萩原 公英 土岐 正史 深澤 忠史 志藤 正之 平成21年卒 山口 理紗 教員 六月 蓮幸 西宮 伸幸 青山 忠 梅垣 哲士 須川 晃資 庄子 和夫	昭和40年卒 高田 菊平 有田 喜一 岩崎 敏一 上野 輝世 上野 公雄 牛山 惠次 加藤 昌弘 神谷 雄雄 河村 瑞弘 藤崎 博太郎 山田 向喜 佐藤 宗南 寺田 高徳 森田 尚 小谷 将彦 片桐 正志 鈴木 博一 丹野 幸久 冬室 誠 三宅 久 相見 光郎 石井 昭久 橋 勝行 重田 勲次 塚本 豊 堀内 隆雄 森田 正重 渡邊 仁 真下 清 宮城 晃 木村 勲 沢田 金吾 館 敏夫 白龍 美津夫 彦田 一夫 丸山 武紀 玉塚 亨三 今田 雅躬 増村 正志 岡本 雅美 秋久 俊博 中川 芳雄 小井 敏志 豊田 文江 小茂田 英男 佐藤 憲一 高野 孝志 志村 修司 野沢 美文 元木 英二 和久井 弘子 澤崎 芳男 成田 勝紀 平成19年卒 上田 寛二 上原 浩夫 佐藤 栄一 日日出夫 正之 中島 邦夫 中野 功 関口 真理 長井 一良 平成51年卒 井之上 佳三 槻 公一 高野 智 佐野 勝宗 平成52年卒 飯田 祐一郎 栗村 嘉明 萩原 謙二 萩原 公英 土岐 正史 深澤 忠史 志藤 正之 平成53年卒 五十嵐 博 吉田 光夫 大野 正博 大野 宏明 目良 昌三 平成61年卒 小田原 豊
--	--	---	---	--	---	---	---	--

## 編集後記

学生時代にひよんなことから？工化時報の編集委員に参加させていただいて、はや20数年の時間が過ぎてしまいました。学生時代は、編集作業を行うのではなく、もっぱら編集会議後の宴会に出席するのが仕事だったような…。今となつては楽しい思い出ですが。

昨年は、日本人のノーベル化学賞受賞や、探査衛星はやぶさの持ち帰った物質の調査等、科学の分野にスポットライトがあたった年ではなかったでしょうか。一方では、中高生の理科離れも指摘されている昨今であります。そのような時代の中で、学生とOBの皆様を結ぶ「工化時報」も27号を迎えました。更に充実した内容の「工化時報」となるよう心掛けていきたいと思ひます。皆様方の一層のご支援をよろしくお願ひいたします。

(工化時報編集委員 平成2年卒 橋本徳子 記)

## お知らせ

### 平成23年度の行事予定

5/21(土) 工化会総会 15:00～ (121会議室を予定)

※総会后、工化会ホームカミングデーを開催

7/23(土) 一日体験化学教室

7/31(土), 8/1(日) CST オープンキャンパス 2011

### 連絡先

- ・工化会及び会費に関する問合せ→庶務(澤口 TEL:03-3259-0819)
- ・住所変更に関する問合せ→会員(櫻川 TEL:03-3259-0802)
- ・工化時報に関する問合せ→会報(秋久 TEL:03-3259-0806, FAX:03-3293-7572, E-mail:jihou@chem.cst.nihon-u.ac.jp)

### 広告募集

工化時報では会社広告を募集しています。掲載の詳細につきましては会報委員会までお問い合わせください。

掲 載 料 1 件 : 10, 000 円

### 発行所

東京都千代田区神田駿河台1-8  
日本大学理工学部工化会会報委員会

伊藤和雄, 永島一男, 小川 誠, 橋本徳子, 石黒香織,  
秋久俊博, 谷川 実, 遠山岳史, 平野勝巳, 森田孝節

学生編集委員

3年 秋山希望, 池田有沙, 葛山 諒, 澁井岳史, 三品優李  
2年 阿川由里, 齊藤 翔, 田丸慎司, 鳴海奈々, 森田啓子

ホームページ, <http://www.chem.cst.nihon-u.ac.jp/index.html>